

PHD LETTER

43

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1992・6

- 研修生レポート..... 4・5P
- ツアーレポート、タイ・カレン/フィリピン・ネグロス..... 3・6P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会

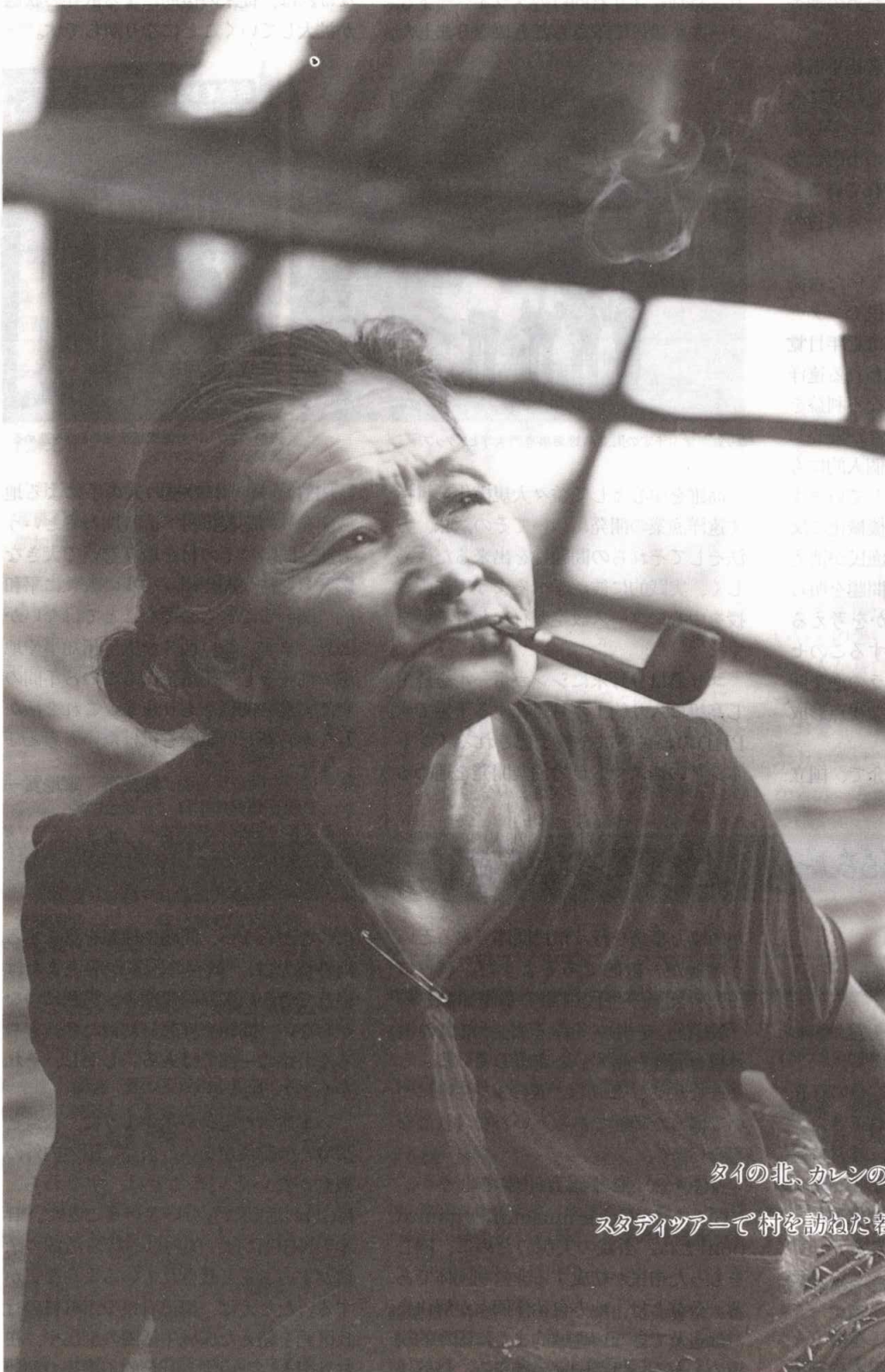
編集人：草地 賢一

住所：〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202

TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867

郵便振替：神戸1-29688 財団法人ビー・エイチ・ディー協会

定 価：100円



はじめてみた日本の人は
兵隊さんで

みんな足が短かったから

わたしらプ・コー (カレン語で
短い足の意味、転じて日本人を指す)

と呼んだんだよ。

でもあんたたちは

プ・コー (日本人) だけど

ト・コー (長い足) だねえ。

タイの北、カレンの村であったばあちゃんが
スタディツアーで村を訪ねた若い参加者に話してくれた。

草の根の人々を訪ねて ユリ君の台湾研修

去る3月31日から1週間弱韓国で92年度の韓国農業比較研修の事前打合わせを済ませ、4月6日に台湾を訪問しました。

インドネシア、西スマトラから招いた最初の漁業研修生、ユリ・タムリン君のリフレッシュコース設定のための調査、調整が目的でした。

私にとっては1974年1月以来18年振りの再訪でした。台北を素通りし高雄に入るまでにのどかがらっぽくなってしまいました。この二つの大都市の市内の空気は、車などの排気ガスで汚れているようです。オートバイに乗っている人達の多くはマスクをしていました。

高雄ではかねてから連絡していた台湾基督教長老教会が運営する漁民センターを訪ねました。このセンターは近年目覚ましい発展を見せているといわれる遠洋漁業の船員が蒙っている様々な不利益を是正し、少しでもこれらの人々が安心して働くことができる環境を、個人的にも社会的にも創るための活動をしています。

漁業の大規模化、組織化、機械化に反比例して漁民社会が崩壊し、漁民が消えていく台湾の漁村における諸問題を明らかにしつつ、「開発」とは何かを考える研究も実践的に取り組もうとするこのセンターで、ユリ君が西スマトラの漁業開発を考えるということも大切な視点形成になると思われま。

更にこのセンターからの紹介で、国立

高雄海事専門学校（日本の水産大と商船大を併せたような大学）、漁業科を訪問しました。科長の鄭教授は東京大学の博士号を得られる温厚な印象の学者、黄教授は若手の水産学者です。お二人ともPHDの開発協力の方法に理解を示され、特別にユリ君向けのプライベートなコースを設けて下さるようになりました。



ユリ君が学ぶ予定の国立高雄海事専門大学とスタッフ。

高雄を中心として益々大規模化を目指す遠洋漁業の開発についてその意味、方法そしてそれらの問題性を出来るだけ易しく、実践的に彼が学べるよう現在両教授を中心にコース設定が行なわれています。

ユリ君は9月末にシンガポールを経由し高雄に入り約1カ月滞在する予定です。PHDのねらいは今後予想されるインドネシアの西スマトラの漁業開発を進める

にあたって、中央政府や州政府が考える計画立案の段階にユリ君のような現場の職員が出来るだけ漁師の立場からの意見や考え方を代弁するようになることです。

貧困が生まれるのは個人に原因があるのかも知れません。しかしそのほとんどの理由は構造的なものです。援助がモノ、カネで個人に直接届けられたとしても、貧困の構造（仕組み）をよく踏まえそれを少しでも変化させられるように使われなければ、従来の援助による依存の状態が拡大していくことになりがちです。



漁民のきびしい労働環境改善の動きを進める漁民センターとスタッフ。

PHDが願う草の根の人々による地域開発への応援は村へ直接関わるという方法と同時にその村を取り巻いて大きな影響力を持つ郡や州レベルの人々に平和的に関わることも必要なことではないかと思えます。幸い西スマトラ州知事や地域の郡長そして州議会にもこの8年間の交流で良い関係があります。これを活かしながら新しい試みを広げたいと考えています。

総主事 草地賢一

私もちよつと 世界を斬る!

日本のNGOの現状 についての感想

金谷 謙(市川市)

元アイオワ・ピース・インスティテュートインターン

最近、日本のマスコミでNGOの存在がにわかにクローズアップされてきた。6月の地球サミットを控えて、4月には、学者や弁護士・NGOの代表などが集まって「地球環境凡人会議」が開催され、また、5月初めには、地球環境アジアNGOフォーラムが行われたことをメディアは報じている。

それらの報道から判断する限り、NGOは地球環境問題への取り組みや途上国開発といった、日本国外で外国と何ら

かの協力事業を行う市民団体であるという理解が一般的であるようだ。試みに1992年度版『現代用語の基礎知識』の「NGO」を引いてみると、「市民の海外協力団体を指す」と定義している。しかしながら、これは、NGOの性格について偏った理解であるといわなければならない。

NGOは、海外協力団体ではない。NGO (Non-Governmental Organization) とは、公益の実現のために、関心をもった市民が結成する非営利団体である。公益とは、地方自治体個々が解決または追及できない地域的または国家的規模の、あるいは、国家の枠組みでは解決または追及できない国際的規模の、営利

につながらない、問題や理想を意味する。海外協力は、「既存の国家が解決または追及できない国際的規模の、営利につながらない、問題や理想」にあたり、もちろん公益の一部ではある。しかし、それが全てではない。

いま述べた定義が示すように、公益と国境とは関係がない。公益に国の内外の観念がないということは、すなわち、NGOの活動にもないということだ。日本のNGOには、国内における活躍の余地がずいぶんと残されているような気がする。たとえば、都道府県や市町村の行政区画を超えた広域生活圏の創出や、在日外国人にたいする社会的不平等の解消である。

第8回

タイフォローアップ 各スタディツアー報告

92.3.25~4.1

昨年3月に続くタイ北部メーホンソン県へのツアー。3期生ブリチャーンさんの村と10周年記念マミムセセッション、アジア見聞来日したクルー、クルポー、バリワールさんの村を訪ねました。チェンマイで合流した3人を加えて13人がカレンの山村の人たちと交流を深めました。

(コース)大阪-チェンマイ-メラノイ村-ホイカイバー村-トゥンバーカー村-ホイホン村-スワンドク村-チェンマイ-大阪

泣いて、笑っていい気持ち

益野裕子(大分市・短大生)

笑いたい時に笑いたいだけ笑い、泣きたい時に泣きたいだけ泣いたツアーだった。タイにいる間、自分はいつも輝いてたような気がする。みんなも輝いてた。心の中の嫌な気持ちは全て消えて、あることすら忘れていた。いつも心は大きくカレンの空みに開いていた。カレンの人の心に近づけた気がした。短い滞在だったのにあんなに優しくあつたかくてもう一日泊まりなさいと泣いてくれた。なぜこんなにあつたかいの？

もつといたい。

山端宏弥(兵庫県加古川市・小学生)

7泊8日の短い間やったけど、めっちゃ楽しかったし、いろいろなことを勉強してもらった。とくにタイの子どもの遊びを覚えてもらった。バレーとサッカーをまぜたようなタクロウという遊びだった。

家族との生活

田中裕美(福祉施設職員・西宮市)

カレンの村から日本に帰ってきて1カ月以上になる。帰国当初の興奮は日々の生活の中で徐々に冷めていっているが、私の中で今回の体験をどう理解すればいいのか全く解らないでいる。ただ1つ言い切れることがある。カレンの村には家族を中心とした「生活」があつたということだ。これがカレンの人々の優しさの源であると思う。

今回、私は一年間続けた会社勤めを辞め、その直後にタイへと旅立った。毎朝、通勤列車の中で会う「おじさん」、会社で残業を毎晩やっている男性社員・・・彼らはあまりにも疲れた表情をしていた。「この人達の家庭生活はどうなっているのだろう」といつも考えずにはいられなかった。

人間の幸福ってなんだらう？ それはウサギ小屋を手に入れることでもなく、子供を有名私学に通わせることでもなく、きっと家族と共に日々の生活をする事なのではないのか...とうっすらと確信で



きた。

カレンの村に行かなければ家族との生活の大切さが解らないなんて、いままで何をしてきたのだろう・・・と悲しい気持ちになってしまいます。でも、今から私なりに「生活」を探していくことが、カレンの人々と同じ立場に立つことだと思つている。それに対する具体策がないことが私を混乱させているのだろう、と思つた。



布のグループと交わるトゥンバーカー村で。中央はブリチャーンさんと富永さん。

村のおばちゃんの一言

美木朋子(神戸市・高校生)

カレンの人達は素晴らしかったです。日本人が忘れてしまったものを持っていました。でも「お金がほしい。日本人のような暮しいです」とカレンのおばさんが言ったとき愕然としました。そう思うことはあたりまえのことで、悪いことだとは思いません。でもそれによってなにか切り捨てられるのか...ということもわかってほしいです。日本がしてしまった過ちをカレンの人たちに繰り返してもらいたくないのです。

私は少しだけでも本当にカレンのことを理解できたと思います。そして本当はあまり好きでなかったアジアがカレンとの出会いで好きになりました。私がカレンの村で体験したこと、考えたことは、一生忘れられないことです。

バナナの房は重いぞ

大西貞一郎(加古川市・小学生)

奥の村でぼくは佳子さんととりました。写真をとったり、歌を聞いたりしました。少年にバナナを持たしてもらいました。すごく重かったです。こんなことができてすごいと思いました。日本とちがいで、自然がいっぱいで、川もきれいな人々はとてもやさしかったです。

ワタシはテング

富永楓(長野県戸隠村・染織家)

日本を離れて日本を見る。外国の中に日本を見ることができた。つくづく私は井の中のかわずになつていて思つた。自分で自分に枠をはめていること、日本じゃ当たり前なのが外国に出れば常識になること、そして買春ツアーらしきおっさんをみて、日本は絶対におかしい、こんなことしてたら日本はつぶれると感じた。そしてその中に自分があること、これが一番怖かった。日本はいつのまにか、テングになつてた。日本改めテング国。日本人改めテング人。かくいう私もテングに染まっている。これからどう生きるべきかな。知ってしまった以上元には戻れない。こうなったらチャンスがあるたびにカレンの村へいこう。

せいかつのちがい

岸本悠一郎(加古川市・小学生)

ほんとうに、たのしい11日間でした。日本とタイのさというのがわかるような気がしました。日本はぜいたくのしすぎなくとも思いました。

土地の霊との出会い

中川佳子(広島市・大学生)

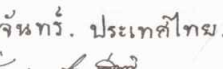
村に滞在できたのはわずかであるが、私は村の人の笑顔に出会い、その度に涙も涙が涙が出そうになつた。そして、私の心はビタミン剤が与えられたように優しくなつていく。

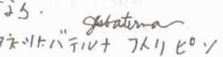
耳にはいるのは、鶏の鳴き声や川のせせらぎ、柔らかな人の声など、自然の営みの中で生まれる音だけ。時間に追われ流されるような日本での毎日。穏やかにゆっくりと流れていく村の時間。今まで日本でのせかせかした、しかも中身の薄

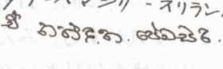
お世話になりました。9期生帰国。

91年4月から研修を行ってきた9期生サウエーさん(タイ)、ナンダナさん(スリランカ)、ラニーさん(バブア・ニューギニア)、ジャネットさん(フィリピン)の4人。3月24日、大阪空港を立ち、フィリピン、ルソン島ヌエバエシーハ州ガバルドン村での地域組織化の研修を終え、それぞれ帰国しました。
日本を立つ前に神戸をはじめ各地で報告会を行い、研修の成果と帰国後の活動の抱負を語ってくれました。1年の研修を支えて下さった方々からの激励にジャネット、ラニーさんはおもわず涙。お世話をしていただいた私たち彼らからはたくさん学ばせてもらいました。ありがとう、そしてがんばってね。

研・修・生・レ・ポ・ー・ト

いちねんかん ながいあいだ お世話になりました。
わたしは たくさん べんぎょう ができました。
むらにかえって がんばります。
どうも ありがとう ございました。
さようなら 
タイの サウエー ムアンチャン

みなさんの お世話に かんじおします。そして、1ねんかん たくさん べんぎょう することができました。ほんとうに ありがとう ございました。わたしは、むらにかえって がんばります。みなさん あげなうさ。さようなら。

インドネシアの セニフィタ

私は日本にきて みなさんにたいへん お世話 になりました。いかに、いかに、いかに べんぎょうが できて たくさん がんばりました。スリランカ むらにかえって がんばります。みなさん ありがとう ございました。みなさん あげなうさ。さようなら。ナンダナ-バブア-ニューギニア-スリランカ


こにもは、いちねんかん で たくさん べんぎょう することが できました。ほんとうに ありがとう ございました。わたしは、むらにかえって がんばります。みなさん あげなうさ。さようなら。ラニー

10期生、始動。

4月18日、19日來日した第10期生4人は、神戸YMCA学院専門学校ランゲージセンターの日本語の先生方、多くの復習ボランティアそして滞在家庭の皆さんの協力を得て、6週間の日本語の研修を終え、それぞれの研修先に出発しました。
それぞれの村の様子、研修生の紹介、日本語研修時の滞在家庭での一コマを特集しました。

ティン・アン・ウィンさん (ビルマ)



ビルマ第2の都市マンダレー市から東へ約20kmの所にウィンさんの住むミャウ・タダインシ村があります。人口約1500人、195世帯で村人の7割が小作農です。農家中心なので収入の額ははかりにくいのですが、日雇いでた場合の日給は約600円。物価は米1kg250円、国産タバコ20本270円。農家の生活は支出が収入を上回ることが多く、借金でつなぎ、収穫時に返済します。
村の農作物は米、豆、胡麻、野菜、果物があります。トマト、豆、米は換金作物として重要です。米→豆→胡麻の順に輪作しており、米の収穫は年に1回が普通です。
日常生活に必要な水は井戸と灌漑水路を利用して使っています。排水処理、家庭廃棄物の処理は十分にされておらず衛生状態が良いとはいえません。そのため下痢、寄生虫、皮膚の病気が多く、マラリア、日本脳炎、肝炎、ハンセン氏病も時折みられます。診療所は約1.5kmの距離にありますが設備も揃わず、十

分な治療を受けることできません。村人の多くが教育を受けておらず、病気、衛生等についての知識が無いことが大きな問題と考えられます。また農閑期の仕事がないこと、村人の生活改善への意識、取組みが十分でないことなど課題が多い地域です。
ウィンさんは38才、初めてのビルマからの研修生。村には奥さんと2人の子供を残しての来日。とても元気で、毎日よく喋るせいか、日本語の上達はとても早く、みんなびっくり。
PHD研修生には数少ない大卒で獣医の資格を持っています。役所での仕事の時期もありましたが、10年前から農村に入り農業で生計を立てながら、保育園、図書館等を運営し、地域の生活改善に努めてきました。そして今回、ビルマYMCA同盟の推薦で来日しました。
日本では、農業技術(酪農、稲作、野菜)、適正技術(炭焼き等)、地域組織化(どう村の人達と協力して生活改善を考えていくのか)を中心に研修します。彼に続いて来年以降、この



村から数名を迎える予定です。



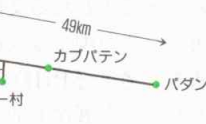
落合修さん宅(伊丹市)

日本で好きになったのは何かと尋ねると答えは「相撲」。とにかく毎晩、勉強が終わった後にスポーツニュースで相撲を観戦。聞けば、テレビを見るのも日本語の勉強に含まれるとのこと。とにかく日本語が上達するならば、こちらとしては何も言うことはありません。

ハスマヤニさん (インドネシア)

西スマトラ州の州都パダンから西に約42kmに位置し、約1800人の漁村が、パシルバルー村です。
男性は、1日2回漁に出かけ、漁獲高により変動、1人の漁師さん当たり1日約240円~1200円の収入を得ています。物価は、国産タバコ20本160円、卵1個で20円、米1kgで80円程度です。
中等教育までは、村人の約60%以上の人が受け、文字の読み書きで不自由することはありません。
漁業振興と並んで衛生、栄養がこの村の重要な課題です。トイレのある家は半分、あとの人は最近設置された公共トイレを使用しています。現在は、一応禁止されるようになりましたが、以前は浜辺で用を足す人が多かったようです。
食事については、野菜の種類が少なく、栄養のバランスが悪いことからくる病気が目立ちます。また保健衛生教育が、十分でないので、村人の栄養、衛生観念が向上しないことが問題として考えられます。
しかし、一方でPKK(家庭、衛生向上の会)という女性グループが、いくつかの活動の中で、栄養、衛生の勉強会も開くなど、意欲的に生活改善を考えるようになりました。

セニフィタさん (インドネシア)



これまでアリ・ムルティムさん(5期'87年)、サムスアリスさん(8期'91年)の男性2名が、漁業の研修を終え村でがんばっています。アリさんサムさんも属しているパシルバルー漁業協同組合の推薦により来日しました。
ヤニさんは、20才。父親を既に亡くし、母親と4人兄弟の長女。
村でアリさんたちが良い先生役となり予習をしてきたので日本語の覚えも仲々です。
日本では、栄養、衛生を学びます。乳幼児、妊婦、お年寄り、年齢や事情によって必要とされる栄養は異なってくるので、ケースに応じた対応ができるようにと張りきっています。PKKにはメンバーとして参加しており、日本の女性グループの活動を参考にしたいと、グループ運営の方法についての研修も希望しています。

通称エニさんは、ハスマヤニさんと同じくパシルバルー漁業協同組合の推薦で、来日しました。
20才のセニフィタさんは、父親を既に亡くし、母親と6人兄弟の末っ子です。
来日した当初、「さむい、さむい」を連発していましたが、気候、生活にもようやく慣れてきたようで、日本語もなんとか意志が通じるようになり、日を重ねるごとに賑やかになっていきます。
研修では主に、妊産婦、乳幼児の健康を各地で学んでいきます。初めは言葉での学習は難しいので、現場を見ていくことから理解を進めていきます。



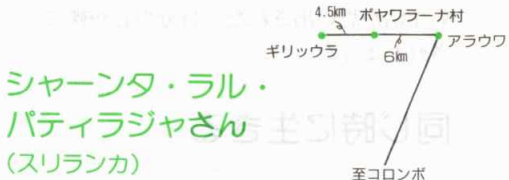
末石仁志さん宅(神戸市北区)

ヤニさんの好きなものは、時代劇とアイスクリューム。アイスクリュームを食べながら、「ハラキリ、ハラキリ」。食べ過ぎのハラキリに注意しましょう。



小林優子さん宅(神戸市灘区)

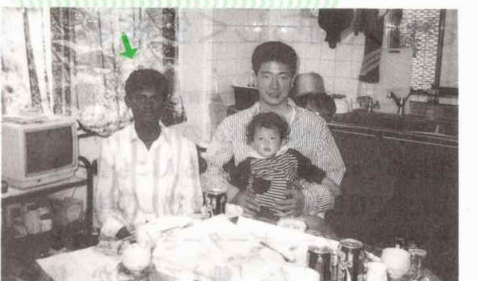
初めて日本のお風呂に入ったとき、自分が出る時湯船の栓を抜いてしまったことがあったけれど、今ではもう大丈夫。日本語が上手になるにつれ、少しわがままが出てきたかな?それだけ居心地が良いのでしょうか。



シャーンタ・ラル・パティラジャさん (スリランカ)

ボヤワラーナ村は、首都コロンボから北東約40km離れた所にある、人口600人の農村です。条件の良い多くの土地を地主が所有し、一般の農家には十分な土地がありません。そのため、十分な収入が得られず、外の仕事で家計上必要ですが、村にはその仕事も少なく、海外へ出稼ぎに行く人もいます。また、灌漑設備も整っておらず、自然任せなので、気候によって収穫高が上下します。農家の収入はビルマと同様計算しにくいのですが、日雇いの仕事で1日300円ほどになります。物価の目安は、タバコ20本150円、米1kg50円、卵10個90円というところです。
農産物の種類は豊富で米を中心に、キャベツ、豆、ナス、タマネギなどの野菜、バナナ、マンゴー、パイナップルなどの果物を作ります。
村には、電気がまだ入っていません。
健康状態、衛生状態については、寄生虫をはじめ基本的な公衆衛生の普及が望まれます。

シャーンタさんは、スリランカのボヤワラーナ村から6人目の研修生。これまでに、ジャヤンタさん(4期'86年)、ニラカティさん(5期'87年)、チャールスさん(短期'87年)、アジャンタさん(6期'88年)、ナンダナさん(9期'91年)の5人が日本で研修を終え村に帰り、頑張っています。
シャーンタさんは25才。両親と8人兄弟の長男。6期生のアジャンタさんが始めた、「アジアの風農場」による推薦です。
日本では、養鶏、稲作、野菜を中心に学びます。特に養鶏は、村であまり普及していないので、アジャンタさんが取り組む酪農のように、グループで実践していきたいと意欲満々です。また、農業協同組合、産消提携運動の仕組み、考え方を学び、村で活かしていきたいと考えています。



萩原正徳さん宅(西宮市)

1才の奈央ちゃんからは「ジャンジャン」と呼ばれ、ご近所でも一緒に食事したり、子供たちと遊んだり、人気者です。今度、シャーンタさんがお世話になった方々に、カレーをご馳走したいとか。ほどほどの辛さをお願いします。

い生活が思い出された。自分の心が裸にされたようだった。

同じ時に生きる

北原葉子(神戸市・大学生)

カレンで貰ったものは大きく、暖かく俸せただけけれど、自分の抱いていた理想をたたきつぶされた思いをたくさんした。なぜ幻想をあそこまで美しく抱いていたのか解らない。自分が貰ったものをどう返していけばいいのだろうか。未来から過去の世界に介入しているかの優越感で、本当のものを見る目を塞がれていたように、今となっては後悔の念で思い返

してしまう。実は時の軸というものと同じなのだ。

人間同士の交流を

今井昭仁(東京都・大学生)

発展という名を借りて物欲的な行動をとることで失われる文化は多い。それを保護し、また現金収入策を含め村の生活改善を考えるとPHDの協力の難しさが伺われた。発展途上地域の問題解決のために日本は金だけでなく人材も出すことが求められている。これをさらに進めた村の人づくりを行っているPHDにはすこみを感じる。全人類が運命共同体とな

っている今、このような人間同士の交流は大切なものとなっている。この交流にわり、人間は皆同じものだと感じ、日本人が外国人に持つ偏見をなくすことになるだろう。私とその証明です。

カレンの踊りの本場で

田辺智子(伊丹市・短大生)

私は昨年10周年記念行事で日本にやってきた4人のカレンの人と民族衣装を着て舞台上で踊った。村での歓迎会でその本物を見せてもらった。さすがに地元、単なる踊りではなくていつも子供をあやしているから、うまい。



子どもたちと校庭でゲーム。これはバツ・ゲーム。(オリンガオの小学校で。)

分も多くありました。次に彼らに会うときには、私がむこうの人達の笑顔をもっともっと増やせられるような人間になっていたと思います。

なんとなくから 本当の理解へ

矢沢俊彦(山形県鶴岡市・荘内教会保育園)

学生時代からアジアには関心を持ってきたつもりであったが、それが表面的なものであることが暴露された旅だった。この国の貧しさ、また豊かさには無知であった。この人々に与してこなかった私は加害者であり、抑圧者であった。にもかかわらず、皆、心から歓迎してくれた。それにしても日本で得られるアジアの情報の量は、本当の関心に結びつかなかったのは何故だろう。何となくわかつたつもりでいることこそ恐ろしいことだ。

不正と暴虐故に生きる権利を奪われる子供たち、悪条件にめげず、明るく助け合って生きる人々、彼らの多様なおおらかな人生への姿勢。私は帰ってきて、日本はフィリピンとは別の意味で、抑圧大国であると感じた。保育教育も社会生活も、様々な縮付けから解放されなければならない。そのヒントはアジアに豊かにあるのだ。

第2回

保育者のための第3世界スタディツアー報告

92.1.9-17

昨年6月に予定していたこのツアーは、ピナトゥポ火山の噴火により延期になっていましたが、保育園々長、保母の7人の参加者がルソン島サンバレス州火山被災民の定住地区、ネグロス西州のNPA(新人民軍)と政府軍の争いによる国内難民の再定住地区、都市部の貧民の状況そして保育の現場から学ぶ旅を行いました。(コース)大阪~マニラ~イバ市~バコロド市~オリンガオ村~マニラ~大阪

子供に伝えたいこと

曽根田幸子(東京都・さくら保育園)

旅から帰り、また忙しくかつ楽しい仕事に戻り、あっという間に過ぎてしまう毎日を大切に生きていくことから始めたいと思いました。一生懸命になってやり遂げる姿勢を子供たちに見せたい、そこから生きることを伝えたいです。自分以外のもの、人、国に目をむけた時、共に生きることを考えられる大人になってくれればと思います。ほんの小さなことにも、目や耳を傾け、共に感じ、悲しみ、喜べる、そして生きることを考えていける人になって欲しいし、私もそうありたいと思っています。

より人間らしく生きる

亀田正己(尼崎市・みどり野保育園)

ネグロスの困難な状況の中で、村人の生活のために頑張っている人にも会いました。PHD研修生の送り出し団体、カサマのリーダー、ピーターさんが淡々と話してくれました。「餓えて死ぬか、銃で撃たれて死ぬか、どちらかしかないのなら、わたしはより人間らしく生きて撃たれて死ぬ方を選ぶ。しかし、それは必ず一粒の種として多くの実を結ぶことになる」と。現に過去3年間に20人が殺された村で、そのように語るのです。

ものの大切さ

西沢久美子(東京都・さくら保育園)

ネグロスで公立の保育園に行きました。そこでは手づくりのおもちやばかりで、それも日本なら捨てるようなびんのフタをあげ鈴にしたり、空びんに水を入れ棒でたいて遊んだり、こわれれば新しく買うことがあたり前の日本とは大違い。日本の豊かさはこの貧しい人達の上にあるという言葉がツアーの最中、説明を受けましたが、私たち一人一人が、物を大切に使用しているか、使えるものまで捨ててないかなど、今までとは違う生活を目指さなければならぬし、そのことを子供にも教え続けていかなければならないと思っています。

笑顔を増やせるように

毛利美子(西宮市・砂子療育園)

今回の旅で各地を訪ね、信じられないような生活を送っている人達に出会い、改めて自分の生活を見直すことができた気がします。自分がこの人達に何ができるのかの答えはまだうまく表現できません。私自身ももっとこの状況を生みだした社会のしくみを学ばなくてはと思います。困難な中でもかかわらず笑顔の少ないところか、皆、明るく生きているという印象が強く、逆にこちらが励まされた部

PHD NEWS

【会費・ご寄附寄託状況】

1992年2月	146件	4,945,997円
3月	244件	2,482,903円
4月	416件	3,528,967円
	806件	10,957,867円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴致しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

【新しい理事に遠藤氏、金光氏】

5月18日開催の第27回理事会において池野清和氏、高橋良雄氏が退任し、代わって遠藤敦雅氏、金光清行氏が就任しました。

【恒例 草の根生活塾参加者募集中】

今年で8回目を数える草生活塾。200年の歴史を誇る菘茸きの農家で繰り広げられる5日間。川での水汲み、カマドで炊事、アジアのスライド、研修生の話、「農」体験にキャンプファイヤー。盛沢山の「体験合宿」小中高生からリーダー役の一般・学生まで、暑い夏を約束します!!

7月22日-26日 兵庫県篠山町、丹南町
定員20名 申込締切7月11日
参加費 18,000円

詳しい案内を用意しています。お問い合わせ下さい。

【今年もやりませう 枝打族!!】

去年のママムセッションで好評を得た林業体験、枝打族。今年もビルマの研修生を迎えて、下草刈り、枝打、伐採、間伐とより一段とパワーアップした内容で企画。山仕事のは、頭の仕事を。日本の林業を知り、環境リゾート開発、熱帯雨林の問題を考える4泊5日。

8月5日-9日 兵庫県丹南町
定員20名 申込締切7月25日
参加費 20,000円

○月×日のPHD協会

総主事 草地 夏の長期海外出張を控えいかに安く、無駄なく各地をめぐるかをあれこれ思案。珍しく阪神が調子いいのに、それを見届けれないのが惜しいとか。

主事 藤野 職員となってとうとう10年。給料は少しずつあがってはいるものの、自分への小遣いがここ数年据置にブービー。昼飯をいかに安くまとめるかが目下の課題。近所が一番安いラーメンは350円。

主事補 小松 PHDの歴史始まって以来、初

【赤道直下の漁村へ、スマトラツアー】

昨年サムスアリスさんが帰国し、10期生の2人が来ているインドネシア、西スマトラ州へのスタディツアー。待ちましたの人も多いことでしょう。この夏は暑い!

日程	8月17日-27日 10泊11日
コース	大阪-シンガポール-パダン市-バシルバル-村-アイルバンギス村-ブキティンギ市-シンガポール-大阪
定員	10名 費用 約230,000円

サムさん、アリさん、アフナルさん、ベティさん、ファイジンさん、ユリさんに会い、村の生活を体験。研修指導者伊豆の山本さんが漁船に乗っての指導を予定。詳しい案内を用意してます。

【新職員、吉岡をよろしく】

“○月×日”でご報告のように中尾卓英の後を受け、4月より吉岡浩が研修担当となりました。静岡市出身、25才。龍谷大卒そして神戸への独身。鍛えてやって下さい。



生活の中 への伝統

チェスー(ブラウス)に感激。これはすごい。地機(いざり型の機)で、8~10枚分の紵紵分で朱子、杉綾様の模様を織りだす。モンヤヤオの他の山岳民族の糸と針による手法に対し、カレンは織り。ぱつと見の派手さはないけれどすごく高度なんですよ。

彼らが生き続けるのと同じように、残す仕事も絶対必要、伝統は一旦ストップすると全く違う解釈がついて、とんでもない方向へいくものだから。そして考えれば考えるほどコスチュームはカレンの一部であるということ、布だけを一人歩きさせてはいけないと思った。

【これからも続けます。書き損じハガキキャンペーン】

ありがとうございます。3月より実施しているこのキャンペーン。早速、遠くより近くよりお送りいただき、書き損じハガキ、未使用ハガキ・切手など、各地から続々届いています。息長く続けたいと思いますので、お知り合い、ご近所の方にも呼びかけて下さい。なおご芳名は8ページに掲載致しました。

(内訳)	(相当額)
41円はがき	577枚 20,772円
40円はがき	584枚 20,440円
30円はがき	3枚 75円
20円はがき	100枚 1,500円
10円はがき	90枚 450円
7円はがき	64枚 224円
5円はがき	1枚 3円
その他のはがき	19枚 962円
未使用切手等	43,333円
	87,759円

ひとつの村で誰もがもちこんだのか羊毛を扱っていた。この気候では良い品質の毛は難しい。その上に木綿と同じやり方だから紡ぎも染色も不十分、撚り止めも多分してないだろう。自分たちも使わず、市場にだせないものを作ってしまうのだろ。カレンにはいいものを他にたくさんもっているのに、いいもの悪いものを見わける判断力を村の人が身につけていかないと。援助って難しい。

お金もモノも技術も必要だけど、選ぶ力がなければ使いこなせない。日本からの一方通行の情報ではうまくいかない。

第8回ツイツアー参加、染織家(長野県戸隠村) 富永楓

の2年目女性職員となる。嘱託から正職員になるに伴い責任度増、2年目の熟練への周囲の期待増、休日一日減で悲鳴をあげる春であった。

主事補 吉岡 2月なかばからの見習いを経て4月から研修担当として登場。一人暮らし故、夜の食事の支度は手抜きのため、昼食で一日の栄養の多くを摂取。若手男性職員伝統の大飯食らいの灯は消えず。

前職員 中尾 3年間のPHDでの修業を終え、新聞記者として鳥根県松江市に。鳥根にはこれまでも研修生がお世話になっており、

さらなる浸透のためにPHD松江支局長を命ず。むろん無給でね。

前職員 平野 10周年記念事業の真只中に助っ人として登場以来、明るさ・元気さ・にぎやかさをPHDにもたらしたが、4月なかばにその若さを大いに惜しまれつつ引退。聞けば神戸を離れるとか、移った先のPHD拡張員を命ず。

10期生の日本語の復習のお手伝いとして永井さん、田路さん、高平さん、蜂谷さん、大内さん、仲本さん、丸山さんが交代で事務所へ。何故か全員女性。



編集後記

4月の下旬に久しぶりに事務所に顔を出したら、ひょんなことから今回のレターの編集メンバーとして編集後記を担当することになりました。まあ、なんと簡単にPHDの活動に参加できること！

先日、事務所でレターの編集をああやこうやとやっている、なの花の会（研修生がお世話になりました）の方が、「ラニーさんの住所を知りたくて。」と

事務所に寄って下さいました。そしてお話をしながらポロッとアイデアが。

「書き損じハガキの整理用の繰り越しノートを作っておけば、ふらっと事務所を訪れた人でも簡単にPHDに関わるのでは。」とのこと。じゃあ、さっそく作りましょうと繰り越しノートが出来上がりました。

PHDへの関わり方はいろいろあると思います。一人の頭では思いつかないようなことも、いくつも頭を寄せ合えば、そこから生まれるアイデアはどんどん広がります。「私は何も出来ないから…。」

という考え方はこの際抜きにして、少し一歩を踏み出してみれば、きっとPHDはもっともっとおもしろくなると思いますし、何よりみなさんが“いきいき”してくると思います。そんなみなさんの笑顔と出会いたいなとびんきーは思います。

最後になりましたが、年間計画とアンケートに対して、お問合わせ、お返事をいただいています。ありがとうございます。

びんきー

＜編集メンバー＞

東恵理子、今出敏彦、江草マサ子、柿原登志夫、児島章一、清水晴美、田尻啓子、永井美佳、平野真理、美木朋子

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。